



開会のご挨拶 辻井重男(つじいしげお)

日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業電子社会システム研究推進委員会委員長、東京工業大学名誉教授、電子情報通信学会名誉員、IEEE東京支部長、郵政省電波管理審議会委員

所属:中央大学 研究開発機構長

著書:「暗号-ポストモダンの情報セキュリティ」

受賞:電子情報通信学会功績賞、郵政大臣表彰、大川出版賞、

日本エリクソンコミュニケーションアワード賞他

「インターネットと教育」フォーラムの開催に当って

本フォーラムの開催に当りまして、一言、御挨拶させていただきます。

日本学術振興会では現在、未来開拓学術研究推進事業を積極的に展開しており、百を超えるプロジェクトが進行中であります。これらの殆どは自然科学あるいは工学系のプロジェクトであり、その中において、私が委員長を務めております電子社会システム研究推進委員会は例外的な存在であります。本委員会の下に、法律、経済、著作権等の社会的システムに関する3つのプロジェクトと合せて、「情報倫理の構築」と題するプロジェクトが設置され、活発な研究活動が進められております。

さて、情報ネットワークの地球的規模での浸透によって、国境を超えたサイバー世界が築かれようとしており、その中で、経済システムや法制度はもとより、人々の価値観や倫理についても再構築が求められております。

日本は、幕末から明治への変革期を乗り切り、強兵政策による挫折は別として、1980年代までほぼ順調に富国を達成してきました。この間、知識人達は、近代の超克に悩み続けていました。例えば、夏目漱石は「神経衰弱にならない程度に内発的に変化していきましょう」と言い、河上徹太郎は、良く知られている座談会「近代の超克」(昭和17年)を“日本人の血と不様に体系づけてみた西洋知性の超克”と締めくくっております。

こうした知識人達の悩みをよそに、日本人が内発的に変化することもなく、経済面で成功を収めることができたのは、農業社会と大量生産型工業社会が、ムラ社会の中での情緒的連帯感や集団志向性の強い日本人向きの社会という面では同質的であったからではないでしょうか。

しかし、情報社会は農業社会や工業社会とは異質の社会です。そこでは、自立した個の強さや、合理的精神と観念的な世界に対する豊かな想像力を合せもった高い知性が要求されます。

日本人も“内発的”に変わっていかねば、グローバルな情報社会を生き抜いていくことは難しいと思われれます。

こうした観点から、本フォーラムのテーマ『インターネットと情報倫理』は極めて重要なテーマであり、今日一日十分に、議論が深められることを期待致しまして、私の御挨拶とさせていただきます。